

頭がガンガンする。昨日は久しぶりに飲んだ。喉の渴きを覚え、億劫げに身を起こす。

「水……」

ガシャンと鎖が鳴り、手首が後ろに引つ張られた。

手錠？

革製の輪の内側にはファーが装着され、手首を痛めない工夫が施されていた。恐らくソフトSサイズの用の手錠。通販サイトの写真で見たことがある。

背中に当たるマットレスは弾力に富み、糊の利いたシーツが敷かれていた。足を伸ばして探り、面積の広さに驚く。

遊輔は手錠に繋がれ、ベッドに仰向けていた。

視界は一面真っ黒。目隠しをされている。僅かに感じる濃淡は布を濾して届く室内灯によるもの。

視覚以外の感覚を研ぎ澄まし、雑駁な情報を拾い集める。かすかに空調の音が響く室内は、快適な温度と湿度に保たれていた。余程防音対策がしっかりしてるのか、あるいはマンションの上階に位置するのか、都会に付き物の車の走行音は聞こえない。

犯人は誰だ。

フエイクニユースでハメた芸能人、不始末をしでかしたヤクザ、女を寝取ったチンピラ……日頃の行いが悪いせいで心当たりは腐るほど、候補を挙げ連ねていけばきりがない。

落ち着け俺。

これしきで取り乱すな。

布の内側で目を瞑り、深く息を吸って平常心を取り戻す。

拉致監禁されるのは人生三度目。一度目はヤクザ、二度目は半グレ。最初はパイプ椅子に縛り付けられ、次は煙草を押し当てられた。今回はまだマシな方、過去に比べれば丁重な扱いと言える。

とはいえ、危害を加える気がないと油断するのは早計。犯人の目的が掴めぬ現状、判断は保留しておく。

靴は脱がされてるが靴下は穿いたまま、スーツも身に付けている。盗られた物はどうだ、背広の内ポケットに入れたスマホと財布は無事か。最悪財布は諦めが付くが、データが詰まったスマホに関しては、敵に没収されたらおしまいだ。

敵。

犯人はバンダースナッチの敵対者？

恐ろしい可能性に思い至り血の気が引く。バンダースナッチの正体がバレ、恨みを持つてる人間に襲われたの

だとしたら、相棒の身も危ない。

「！　っ、」

逃げろと伝えなければ。鎖が許す限界まで引つ張り、背広の内側に手を突つ込もうとする。もうすこしで届きそうに届かない、じれったさに苛立ちが募りゆく。

遊輔を放置する理由はわからない。恐怖を与える為？　疑心暗鬼を煽る為？
あんまり考えたくないが、拷問の準備でもしてるのか。

「目が覚めましたか」

懐かしい声が不安を消し飛ばす。

「薫！　おま、心配させやがって」

反射的に顔を向ける。

「喉渴きましたよね、お水用意しますから」

ベッドがギシツと軋む。片膝を乗り上げた気配。疑問を呈す暇すら与えず、唇で塞がれた。

「ンぐ、」

口移しで水を飲まされる。零れた水が喉仏を伝い、首筋を経てシャツに吸われていく。やめろと叫びたくても唇は離れず、性急に嚙下するしかない。

「かはっげほっ」

盛大に噓せた。顔に執拗な視線を感じる。至近距離で観察されてる。

「少しは楽になりましたか」

「悪ふざけはよせ。手錠外せ。目隠しも」

「駄目です」

「お前がやったの」

「はい」

薫が穏やかに微笑む。見ずとも気配だけでわかる。

「覚えてませんか？ 俺の肩借りて、酔い潰れて帰宅したでしょ」

「ここは」

「俺の部屋のベッド」

「開かずの間か」

薫のマンションには遊輔が立ち入りを禁じられた部屋がある。電子機器が沢山置いてあるから、というのがその理由だ。故に遊輔はリビングのソファで寝起きしていた。

「お招き預かり誠に光栄って言いてえとこだが、ちよつとばかり招待の仕方が手荒じゃねえか」

「でしようね。怒ってますから」

「なんで」

素で返す遊輔に対し、声音が一段冷え込む。

「心当たりありませんか」

「アレだ、冷蔵庫に入ってたサラダチキン食った」

「はずれ」

「コーヒー豆の補充忘れた」

「違います」

「風呂掃除サボった」

「他は」

「寝煙草でソファー焦がした」

「火事になるんで本当やめてください、スプリンクラー発動したら大変です」

早々にネタが尽きた。

言葉に詰まる遊輔に向かい、静かに訊く。

「昨日一緒にいたの誰ですか」

「誰って……」

眉間に力を込め、途切れた記憶を辿る。昨日飲んだ相手は……。

「元同僚。週刊リアルの同期」

「仲良さそうでしたね」

「そこそこ」

「付き合いあるなんて意外でした」

「数少ねえ例外。若え頃から妙にウマ合つて、今でもたまに飲みに行くんだ。ネタ流してもらえろし助かつてる」

「貴重な情報源か」

「やけに突つかканな」

「わざわざ俺がシフト入つてる『Lewis』に連れてこなくていいと思いますけど」

昨日の夜、数か月ぶりに友人と会つた。

場所は薫が勤務する新宿二丁目のバー『Lewis』。入店後はカウンターに並んで座り、浴びるように酒を飲んでお互いの近況を報告し合い、共通の知人の話題で盛り上がった。

談笑中視界の隅に捕らえた薫は、フォーマルなベストに身を包み、ポーカーフェイスで通常業務をこなしていた。

丁寧にグラスを磨き、客が注文する酒を作り、アイスピックで砕いた氷を添えて。

失恋にへこむ常連を構い倒すママの傍ら、口コミ経由で来店した女性に爽やかな笑顔を振りまき、フォトジェニツクなカクテルを提供していた。

不自然な点といえば、サービス精神旺盛な彼には珍しく近寄つてこなかったこと。

普段は目顔で合図を送つてよこすのに、昨夜は一介のバーテンダーとして、当たり障りない接客に終始した。

再びベッドが軋む。足でも組んだのか。

「あの人……最上さん^{もがみ}でしたっけ、親密な間柄に見えました」

「別に普通」

「高校時代のあだ名知ってたし」

「前飲んだ時ポロッと零しちゃったんだよ」

「西高の狂犬の武勇伝聞きたがつてましたね。だけど薄情です、酔い潰れた遊輔さんを置いて一人で先に帰っちゃうなんて」

『アパート追い出されたって本当か。今どこ住んでんの』

『知り合いんち』

『女？ やるねえ』

『違エよ』

『金なら貸さねえぞ』

『たかりにきたんじやねえよ。今はどんなネタ追っかけてんだ』

『返り咲き諦めてねエの』

『単なる好奇心』

『ぬか喜びしちまった、特ダネ手土産に復帰祝いかと』

『お生憎様、あのハゲのツラ見なくてすんでせいせいしてる』

『おいおい風祭、俺と組んでスクープ物にしてきたの忘れたのか』

『昔の話だろ』

『相性ばつちりだったじゃねえか』

目隠しの向こうで独り言ちる。

「熱心に口説いてましたね」

「妙な言い方すんな、アレはただ」

「ただ？　なんですか」

「社交辞令」

「関係持ったんですか」

「あゝ？」

「肩叩いたり背中さわったり、ボディタッチ多かったですね」

「最上はノンケ。俺だって」

「遊輔さんはちがうでしょ」

しっとり汗ばむ首に手のひらが触れ、悪戯好きな指が頸動脈をなぞっていく。

「見せ付けにきたんですか」

「薫」

「チラチラ見てたの気付かなかったでしょ、楽しそうにお喋りしてましたもんね。遊輔さん、あんな風に笑うんですね。砕けた感じの笑顔……」

秘めやかな衣擦れの音。長い指を備えた手が背広の前を開き、シャツのボタンを上から順に外していく。

「俺には見せてくれたことなかったのに」

「そりや十年近い付き合いで、ッあ」

「知ってますよ、俺が小学生の頃から同じ職場で働いてたんですよ。同じネタ追っかけて、同じ車で張り込みして、同じ町中華でお昼を食べたんですよ」

『知ってるか、吉祥寺の点点が潰れちゃったって』

『親父さん年だもんね』

「盗み聞きしてたのか」

薫の手は止まらず、前をはだけていく。

外気に晒された素肌が鳥肌立ち、危機感と焦燥が降り積もる。両手を引っ張ればガキンと鎖が軋り、抵抗が返っ

てくる。

「その手錠氣に入りました？ 嵌め心地はいかがです？ 通販で買ったんですよ、内側にファーが付いてて可愛いでしょ。って見えないか残念」

「いい加減にしねえとキレんぞ」

「ああ駄目ですよギュツてしちや、手のひらに爪が食いこんで痕が付きます。大事な商売道具なんですから扱いは慎重に」

「どの口でほざく」

腹の上に冷たい固形物が落ちた。

「!! いッ、」

体が勝手に跳ねる。

「冷てっ、うあ」

薫が固形物を掴み、あっちこっちへ滑らせる。不規則に痙攣する腹筋から鼠径部へ、脇腹を掠めて乳首へ、さらにはぐいぐい押してへそに埋め込む。

「何かわかります？ 氷ですよ。目隠しされると脳がバグって、ドラッグきめた時と同じ位快感が増幅されるって知ってました？」

カリツと音がする。薫が氷を嘔む。遊輔は肩で息をする。

「何でこんなこと」

「わかってるでしょ」

「最上とよろしくやってたから妬いてんの？ イカレてるぜ、昔馴染みと飲んだだけじゃねーか」

「遊輔さんに戻ってほしがってるみたいでした」

「復帰したって誰も喜ばねーよ」

「バンダースナッチ辞める相談してたんじゃないんですか」

執拗に問いを重ね、引き締まった下っ腹を撫で回す。

「俺の事いらなくなっちゃいましたか」

「Sは趣味じゃねえ、とつとこのうざってえ布と手錠外せ」

視覚を封じられたせいで薫の行動を予測できず、全身が敏感になる。カリツと小気味よい音をたて、薫が氷を嘔む。

また来る。

「~~~~ツあ」

薫の口内で溶かされた氷が、乳首をくにゆりと押し潰す。

「イイ声。感じてます？」

「ねえ、よっ」

「息上がつてるじゃないですか、本当は気持ちいいんですよ」

嘲笑を含んだ声色が鼓膜を翳る。薫が氷を摘まみ、悩ましい火照りを帯びた体の表面に思うさま滑らせる。

「んッ、く、んんッ」

体の上で氷が溶け、透明な雫が肌を濡らす。唇を噛んで懸命に声を殺すも、乳首の甘噛みと同時に半ば溶けた氷が内腿を下り、たまらず湿った吐息を零す。

「次は下着の中に放り込んであげましょうか。霜焼けになっちゃうかな」

「かお、る、やめ、びちやびちや気持ち悪い」

「やらしいな。滴ってる」

「ふッく、うあ」

「今日ばかりは手加減できませんよ、さんざん見せ付けられて我慢の限界なんです」

「最上はただのダチだつて言ってるんだろ」

「証明できますか」

コイツ、本当に薫か。

声まねしてるだけの別人じゃねえのか。